

「早期大腸癌 平坦・陥凹型へのアプローチ」

秋田赤十字病院・外科部長 工 藤 進 英

国立がんセンター中央病院放射線診断部・部長

牛 尾 恭 輔

待ちに待った、すごい内容の本である。選び抜かれた内視鏡写真、切除標本、実体顕微鏡写真、組織像が、カラー写真を通して次から次へ、読者の目に訴えてくる。これらの像を通して、著者の考え方、見識、哲学が、読む人の目と体に伝わってくる。このような迫力があるのは、工藤先生自身が、これまで“幻の IIb や IIc”とみなされていた平坦・陥凹型を数多く発見し、診断し、世界で初めて学問として確立された先覚者であるからである。これまでの常識や病変の壁を打ち破った者にしか書けない、内容が詰まった画期的な著書である。それは、推薦の序を書かれた白壁先生が「大腸診断学における世紀の快挙である。これは、工藤の、日本の業績だ」と述べておられることからわかる。全く同感である。病変の微細構造を実体顕微鏡像や組織像と比較するという、わが国独特の実証主義が脈打っている。

あとがきで、「第1例目の発見の際、戦慄を覚え、その後の8年間、来る日も来る日もこの“幻の癌”を現実の掌中に収めるべく夢中であった」と書いている。彼のこの戦慄、

直観は永年にわたる経験、ものを見る確かな目、豊富な知識があったからこそ生まれたのである。しかも、この戦慄と直観を8年間も、情熱をもって持続させ、ついに集大成させたのである。厚生省がん研究助成金による研究班に、工藤先生に加わっていただき、私は班長報告で本書のいくつかの例を使って、「これは工藤班員が世界で初めて打ち立て、現在、欧米から招へいが来ている業績である」と紹介してきた。そのとき、高名な学識経験者の眼が輝き、会場の皆の関心と呼びこんだことを知っている。同じ消化管の診断学を志している私としては、工藤先生に祝辞のみならず、これだけの業績を挙げられたことに、本当に感謝したい気持ちで一杯である。

ところで、本書は、早期大腸癌を効率的に発見するための、内視鏡検査の実用書としての内容も、わかりやすく述べている。

本書の半分は、約100頁にわたって早期大腸癌の診断学の歴史、検査法、内視鏡診断、実体顕微鏡、拡大電子スコープ、大腸腫瘍の自然史、病理組織診断の問題点、生検と治療

について順序よく書かれている。しかも、ほとんどの頁にカラー写真を多く使って、読者にわかりやすく語りかけるように筆を進めている。著者の丁寧さ、優しさが伝わってくる。また、ところどころ初心者にもわかりやすくサイドメモとして、用語を説明したり、ポイントを解説している。

あとの半分は約100頁にわたって、80例もの早期大腸癌の病変を1頁に1症例が入るようにレイアウトされている。典型例から興味ある例までが、内視鏡像、実体顕微鏡像、拡大電子スコープ像、組織像の所見がコメントと共に述べられている。もちろん、平坦・陥凹型は約30例も載っている。

内容はスマートで、真摯で、丁寧であり、読んでみると工藤先生自身の姿が浮かんでくるようである。早期大腸癌の内視鏡学のみならず、大腸腫瘍学の名著として座右の書になることは間違いない。

● A4 228頁 図15 写真2
原色図797 色図13 1993 定価
28,840円(税込) ㊦400

—医学書院 刊(㊦03-3817-5657)